

## 教科書のない学び

小学校以降の教育には教科書が使用されますが、幼稚園・こども園・保育所などの幼児教育の場では教科書は存在しません。

上越教育大の中沢教授によると4月の4歳児の中でも、4月生まれと1月生まれの10カ月の差は小学生の認知能力で言うと4年生と2年生ほどの差があるそうです。そのため幼児教育は「この活動終了後にみんな縄跳びが●回跳べるようになる」というような達成目標をおくのではなく、「みんなで縄跳び遊びを楽しむ」という楽しみ方に焦点を当て方向目標でねらいを設定します。幼稚園教育要領におけるねらいには「～を味わう」「～を楽しむ」という言葉が多く用いられているのはそういった理由からです。個人差が大きいので教科書のような標準的なものを準備しても、ある子にとっては難しいし、ある子にとっては簡単だということが起きてしまいます。

また、子どもたちは環境を通して学ぶ存在であることから、人や物や時間や空間なども含めて、子どもの周りを取り巻く環境の全てが子どもにとっての教材であり教育的価値があるものです。そういった環境と関わる体験をもとに子どもたちは意味や概念と出会って学んでいきます。例えば、「たくさん入れていいよ」という言葉一つ取っても、目の前にあるのが大鍋なのか、小さなコップなのかによって、注ぎ量は変わるわけです。また、人参が苦手な子の言う「たくさん入れていいよ」と好きな子が言う「たくさん入れていいよ」では求めている意味や量が異なります。

そういったことは相手との関係ややりとり、生活の文脈から生み出され、出会い、学んでいくことであり、教科書があれば効率よく学んでいけるようなことではありません。数字1つにしても、「前から4人までこっちに来て」という集合数としての取り扱いと「前から4番目の子はこっちに来て」という順序数とで意味は異なりますが、幼児教育の中では生活の中に意図的にそういった多様な表現を織り交ぜることによって、体験を通して子どもたちが学んでいくわけです。

多様な体験とよく言いますが、何も特別なことをしなければならないわけではありません。まさに子どもたちにとって身の周りの環境すべてが教材そのものです。空1つ見上げてみるだけでも、「今日の空はなんか赤い空だね。夜になる前に赤くなるけど毎日じゃないよね、なんでだろう」「シューって細長い雲がある!飛行機雲かな?」「なんか月がずっと追いかけてくるみたい」と、さまざまな発見があり、さまざまなことを学ぶわけです。「多様な体験」と「豊かな言葉でのやりとり」。そういった日常が子どもたちの生活や学びをより豊かにしていきます。



【年長】西方遠足



【年中】な～もの森で。



【年長】稲刈り



【2～5歳児】10月お誕生会



【1歳児】おともだちと砂遊び